

『一心院覚書』紹介

中 野 正 明

京都市紫竹招善寺には、東山一心院の開山縁誉称念書狀一通と、『一心院覚書』なる一本が現存する。称念あるいは一心院関係のものがこれまであまり確認されていなかったためか、それらの具体的な性格等について明確でない部分が多い。前者の称念書狀については、拙稿「一心院縁誉称念の史的考察」(『法然学会論叢』第五号)に掲載してあるからこれを参看頂くこととし、さらに掲載の恰好なる機会を得たため、称念の法度類についてまた一心院と知恩院との関係等を知るための史料として、いくらかでも上述した如き現状を補うことになりうればと考え、後者『一心院覚書』の全文をここに紹介することにした。

1、『一心院覚書』

本史料翻刻上の体例は、おおむね次の通りである。

凡 例

- 一、原本に用いられている古体・異体・略体等の文字は、原則として現在通用の字体に改めた。
- 一、変体仮名は、片仮名と同形のニ・ハ等のほかは、すべて平仮名に改めた。

一、原本における欠字・平出については、すべて一字分の空角をおいて、一様に連記した。

二、本文の読解に資するため、読点（、）および並列点（・）を加えた。

三、傍註は、文字の誤りを正すためのものには「」を用い、その他、説明または参考のためのものには（ ）を用いた。註に「カ」の字を添えたものは、断定をさし控えたものである。なお、文意の通じがたい箇所、もしくは特に原本どおりであることを示す箇所には（マ、）を附した。

四、原本における朱筆の部分に対しては、その部分を「」で包み、（朱書）と註記した。

五、寺院名について、特別に旧国名を示さない場合の註記は、京都の都市部を意味する。

（表紙）

（タテ二七・二、ヨコ一九・〇センチメートル）

一心院出入之次第

元禄十六年末八月晦日、一心院末寺聖光寺・称念寺・乘願寺、(京橋小路) (千本) (京橋高辻) (知恩院)当山役者迄訴来候者、(元禄十六年)当年七月十九日称念上人百五十

年忌ニ付、門中之長老各座之説法可相勸之旨、去五月從一心院回文を以被相触候序ニ、古法ニ無之五ヶ条之新条目被差出候、其条目ニ云、

定

一、不憐望世間名利、偏可專出離要法之事、(縁著称念)勿論開山上人制詞也、

一、捨世一流之法式、諸事如古来堅固可被相守之事、

一、香衣并鉦・鐃・鉢・帽子・沓等、且亦長念珠持儀、弥堅令停止之事、

一、於勤行并引導仏事等、称名一行之外、諷誦・読経弥堅令停止之事、

一、道心者衆、大衣之五条袈裟、木綿衣白衣類、弥堅令停止之事、

但シ、小僧達衆、三十歳已前ニ可被改者也、

右之条々、弥不取乱、向後堅固可被相守、若違背之仁於有之者、急度可申付之条、如件、

元禄十六年五月 日

一心院

衆中判

(一心院住持)

混譽判

惣門中

一、右条目之通ニ而者、諸末寺難立、自然と退転可仕候、此趣且那共承、念仏斗之儀者、我々も唱申候、旦那寺を頼

申事ハ、相應之法事を執行仕、先祖をも吊可申ためニ候、然所ニ念仏之外法度ニ而候者、旦那共ハ、他寺之旦那

罷成可申之旨、寺々江断来候、左候而ハ、自然と可及退転難儀仕候、依之去ル五月、(元禄十六年)門中替々一心院江相詰

訴之候得共、依用無之、且那共も相詰訴候得共、一向取上無之候間、無是非各樣江訴上申候、前々之通被致仕置候様ニ、御異見被成可被下由申之、我々返答ニ、如何様之訳ニ而法度書被出候も、此方江為知不申候故、異見難致候、各々幾度も訴可被申と返答仕候、其刻一通之願書差出ス、其文言左ニ記ス、

乍恐口上書

一、今度従一心院被出候条目ニ付、諸末寺寺役相障り候故、五月十九日ニ一臈聖光寺を以數、六月十八日同聖光寺、

七月廿三日同聖光寺を以願候得共、許容不被致候ニ付、八月四日ニ乘願寺・稱福寺・透玄寺・招善寺、同十一日ニ

念仏寺・宗蓮寺・千本称念寺・竹林院・西福寺・嵯峨称念寺・極樂寺、同廿三日ニ専念寺・正定院・迎接寺・靜

林菴・阿弥陀寺・撰取院、同日ニ千本称念寺・乘願寺・竹林院・招善寺、今朝も称念寺・透玄寺を以數候得共、

一心院曾而承引無御座候、依之、諸末寺只今迄勤来候事共相改、檀那用ふニも障り難義仕候、御役人中御相談被

成、一心院衆中江御異見被成被下候ハ、忝可奉存候、以上、

元禄十六未年八月廿九日

称念寺

唱誉印

乘願寺

真誉印

称福寺

自誉印

透玄寺

光誉印

田舎惣代

専念寺
(田井)

覚誓印

惣門中

知恩院

御役人中

一、九月四日之晚、一心院末寺為惣代、(京極綾小路)(五条下寺町)聖光寺・竹林院入来、旦那共相加り、大勢門外迄相詰願申候へ、先日被仰聞

候通、我々も旦那共も、一心院江相詰訴候得共、曾而承引無之、自今以後者、出会・対面も仕間鋪由被申切候故、

無是非各様江頼上候、前々之通ニ而、末寺も相続仕候様ニ、御異見被遊可被下旨申之、依之、其趣内ニ(知恩院住持)而方丈

江致披露候へへ、大勢門外迄詰懸ケ訴候事、他見も悪敷候、殊更騒動ケ間敷、公儀江相聞候者宜ケ間敷候間、

役者寮迄一心院住持・一藁・二老之道心者を呼寄、様子相尋可申旨被仰候ニ付、(知恩院出役)常称院方迄右之三僧呼寄、様子

相尋候得者、古法ニ而候故、条目差出申之由返答、

一、(九月)同五日一心院并善故道心・了伝道心参上、当五月末山江差出候条目、并淀念仏寺出入之節於江戸御裁許状、末寺

入院之砌之手形帳を差出ス、御裁許状之文言、

一心院末寺

淀納所村

念仏寺

念仏寺末寺

祐源菴

同断

浄盛菴

同断

清源菴

同断

称名菴

同斷

西林菴

右六ヶ寺一心院末寺ニ候間、(一)心院弥本寺江可相隨候、并念仏寺隱居慶称庵本寺違背、新地を取立候間、所令追放候、可被得其意候、以上、

寛文三年癸卯十二月九日

(加々瓜置邊、寺社奉行)
加々甲斐印判
(井上正利、寺社奉行)
井河内印判

一心院

末寺入院之節之一札
謹而申上候

一、一心院之御作法、如古法堅固ニ可相守候事、

一、(一)心院本寺江毎月御報謝、如先例随分登山可仕候、末々寺も七月十九日ニハ、毎年召連參上可仕候、但、病氣并往生人

於有之者、各別之義御座候事、

一、住持替目後住之儀、一心院様可為御意次第事、右之条々、永代御仕置堅可相守此旨候、若於令違背者、任法急度可被仰付候、仍後証如件、

年号月日

一心院末寺

何寺

何誉判

一心院

何誉和尚

并役人中

(知恩院住持曰實秀通)

方丈御対面被成、如何様之訳ニ而如斯条目出シ候哉と御尋候へハ、住持返答ニ、拙僧義者曾而不存事ニ候へ共、此兩

(善故)

人之道心者古法之由申之間任其意候、様子ハ道心者共ニ御尋可被成旨申之、二人之道心者ハ御尋候へハ、一心院之古

法ニ而御座候、其証拠ニ裁許状と末寺入院之砌之手形帳を差出ス、方丈一覽被成、此書物之中古法之言有之候得共、

此度書出候五ヶ条之品ハ不相見候と被仰候へハ、其以前開山之弟子長命之者有之、如斯ニ候と咄申候由承伝候と返答

也、方丈被仰候へ、聞伝之分ニ而ハ慥ニ不相聞候、先以ヶ様之条目を以門中之法義を改候儀ハ、其方なと無智之道心

者之分ニ而ハ難成事ニ候、方丈并役者江不相同、任我意候事、理不尽之至候、其上称名一行之外堅停止之旨、条目ニ

書出候此儀者、和漢兩朝之諸聖教ニ相違、且亦諸大祖師之御行義ニ相違之旨、散善義就行立信之下、選択集第二章二

重之卷物、決答銘心抄迄一々御読聞せ、助・正分別之訳、猶亦善導大師・(法然上人)元祖大師・(良忠)聖光上人・然阿上人御勤之次第、

後白川之法皇御如法經之節円光大師御勤之様子、且亦第十三^(元久元年)年之御遠忌於蓮花王院元祖大師御勤之法要を、一々ニ被

仰聞候、其方なとハ披群巖闌、髪を刺道心者ニ罷成候へ者、文盲ニ而一句之經文をも不誑覚候へハ、念仏斗之勤尤之

事候、門中之長老者学生ニ而候へハ、且那之望ニ依而念仏之外之法事をも勤来候事も可有之候、然共捨世寺之儀ニ候

へハ、念仏を専ニ可勤候得共、且那之望を背候へハ、化益も關可申候、菟角爭論不宜候、何事も末寺之衆中を相談之

上ニ而相極可然候、此程諸末寺衆、役者迄度々訴来候得共取上不申候、然共開山称念上人被制置儀も候へハ、各別ニ

而候、若然ハ証拠可成書物有之候へハ、可致持参之旨被仰候へハ、善故・了伝古法之儀と斗、我情強申募、一向得心

無之、末寺共何と訴訟仕候共、御取上被下間敷旨申之退出、其後兩^(善故)人之道心者役者共江相廻り、末山中如何様ニ相願

候共、御取上被下間敷旨願申候、其以後称念上人被制候九ヶ条之条目持参、文言如左、

十方恒沙仏

六通照知我

今乘二尊教

広開浄土門

專修同伴行者可持条々

一、晝夜莫^レ廢可^レ勵^二厭離穢土心^一事、

(法然)
祖師上人云、我等久留^ル三生死^ニ、由^レ昔^{ヨリ}未^レ厭^ル此界^ニ、是故先^ツ應^レ厭離穢土^ニ文、願^ハ西方行者偏^ニ厭離穢土心^ニ、莫^レ拜^ム奏^シ神明^ニ呼^フ諸魍魎^ニ請^フ乞^フ福祐^ニ欲^シ冀^シ中延年^ニ、臨終要決云、放^下身心莫^レ生^ニ戀着^ニ文、了^ス譽上人云、請^フ西方行者莫^レ戀^シ着苦界身命^ニ、已上、一家釈云、大衆同心厭三界文、又云、惣勸^レ厭^ル此人天樂^ニ、無常^ハ苦火燒人^ニ、已上、但、雖^モ專修行者^ニ、若^シ為^ニ弘法外護^ニ、若^シ為^ニ衆生依帖^ニ、帰^シ權神^ニ非^ニ邪因邪業^ニ、若^シ為^ニ名利^ニ事^ニ權亦邪也、法事讚^ニ・觀念法門等是意而已、
(淨土法事讚・觀念阿彌陀仏相海三昧功德法門)

一、行住座臥可住^ニ欣求淨土念^ニ事、

(法然)
祖師上人云、設雖^レ厭^ル此界^ニ、不^レ欣^ル彼國^ニ、不^レ可^レ往生^ニ、是故次^ニ欣^ル淨土^ニ、已上、夫出離生死法、必^レ以^レ願為^ニ先、故^ニ禮讚^ニ云、願共諸衆生往生安樂國、已上、往生要集云、淨土業依^レ願得^レ報、罪報有^レ量淨土報無^レ量、已上、一世勤修須臾間、何不^レ棄^シ衆事^ニ求^ニ淨土^ニ哉、願諸行者努力莫^レ懈、
(取詮欣^ニ往生^ニ外異事・願マシキナリ、玄義云、生死甚難厭、弘法復難欣、共發金剛志橫超斷四流、願入弥陀界、已上、
(觀無量壽經玄義分)

一、仰^ニ二向專念金言^一、信^ニ一心專念教誡^一、拋^シ諸雜行^ニ可^レ成^ニ一向專修之身^一事、

右設雖^レ厭^ル此界^ニ、欣^ル彼^ニ不^レ專其業^ニ、則難^レ成^ニ願次生因^一、故^ニ釈云、隨緣雜善恐難生、已上、願諸行者寤寐莫^レ忘、無余無間可^レ稱^ニ名号^一也、一家尺^云、一心專念弥陀名号等、已上、又云、但、使專意作者、十即十生、修雜不至心者千中無^一、已上、感師云、廢^シ余一切諸願諸行、唯^ニ願唯^ニ行西方一行^一、雜修之者万不^レ一^ニ生、專修之人千無^一二失、已上、選^云、夫速^ニ欲^ニ離^ニ三生死^一、二種勝法中、乃至稱^レ名必得^ニ往生^一、依^ニ三仏本願^一故也、
(選^ニ本願念仏集^一)

一、為^ニ二向專修行者^一、一心願^ニ往生極樂^一者、深^ニ止^ニ穢慢心^一、弥持^ニ三卑下心^一、三^ニ宝可^レ奉^ニ恭敬^一事、

右心雖^レ奉^レ仰^ニ自他一切三^ニ宝^一、身口奉^レ行時、西方念仏一行一願也、故^ニ禮讚^ニ云、南無十方三世尽虚空遍^ニ法界微塵刹土中一切三^ニ宝^一、我今稽首礼等、已上、加之、於^ニ念仏行者^一、十方恒沙諸仏・一切諸菩薩・梵天帝釈・四

大天王・龍神八部隨・逐影・護・愛・衆相・見^{シテ} 阿弥陀經・十往生經・觀無量壽經・般舟三昧經等見、若一分生三穢慢心、縱使念仏、不^レ可^レ往生、別學者 惣生三敬心、若生三慢心、得^ル罪無窮故、須^ニ惣敬除三行障、

一、可^レ奉^レ敬^ニ日本国大小諸神、事、

右我朝、大小神祇垂跡和光御本意、偏為^ニ仏法守護結緣利物也、尤可^レ奉^ニ崇重、何大聖權化奉^レ背哉、但、雖^レ令^ニ參詣、心中不^レ可^レ有^ニ名利祈請、或為^レ護^ニ念信心、或可^レ為^レ奉^ニ莊嚴神德、加樣申、念仏往生期人強神明帰、淨水浴行詣重、弊帛可^レ捧非、只是誠嫌奉^ニマテナリ、但、依^レ人有^レ品、云云、

一、今生存命間、万事任^ニ因果理、強不^レ可^レ歎^ニ世深不^レ可^レ恨^ニ人事、

右壽命長短、果報淺深、皆依^ニ宿業、敢莫^レ悲^レ之、大經云、神明^{（觀無量壽經）}記識犯者不赦故、有^ニ貧窮下賤乞匄、孤独聾盲、瘡癰、愚癡弊惡、乃至有^ニ尊貴豪富・高才明達、皆由^ニ宿世、已上、觀經云、深信因果、已上、釈云、若作^ニ苦因、即感^ニ苦果、若作^ニ樂因、即感^ニ樂果、如下似^ニ以^ニ印々^ニ泥印壞文成、已上、縱遇^ニ何事、是皆宿業也思、弥可^レ願^ニ往生極樂、事、

極樂、事、

一、於^ニ同伴中、雖^レ有^ニ不^レ應意事、以^ニ偏執心、是非沙汰不^レ可^レ致^ニ之、若為^レ自為^ニ他^ニ有^ニ不用之義、以^ニ和合心、密可^レ令^ニ談事、但、敬誠說破之事者除之、

右於^ニ一味安心行者、雖^ニ年來^{（疎遠間）}有^ニ同修業、由^ニ上者、可^レ成^ニ親昵、友、同行善知識尤大切、者哉、而立^ニ我欺^ニ人自讚毀他破和合僧根元、深可^レ用^ニ心之、註云、同一念仏無^ニ別道、故、遠通^ニ夫、四海之内、皆為^ニ兄弟、已上、恭敬同伴思之、深相保重、

一、安心次第、起行配立、對^ニ他宗他門、向^ニ道俗貴賤、不^レ可^レ顯^ニ其色、不^レ可^レ語^ニ其心、況問答往復乎、何況及^ニ靜論乎、若他來有^ニ問、可^レ答^ニ無分別、由、但、除^ニ講延砌、

右且取^ニ秘也、所^レ憚也、自今以後、可^レ停^ニ止其沙汰、円通皇子云、無智男女仏法邪正判、當^ニ此時、王法威輕、七

難世起云ヘリ、依レ有^ル是非沙汰、仏法障難必出来、深可^レ憚^ル之、尺曰^{ハク}、見有^ル修行起^ル噴毒、方便破壞競生怨、已上、此尺常可^レ収^ル心、法然上人七箇条制誡者、無智、弟子等、仮^ニ名專修、依^テ構^ム三種々邪義也、愚者教化令^セ人入^ル邪路、多見、可^レ恐々々、又諍論之處、諸煩惱起智者、遠^ニ離^ス之、二百由旬云ヘリ、或以^テ勝負心、説^フ法、為^ス求^ル眷屬、或以^テ自所知、非^ニ他^ノ道法、或出^ル諸經中、相違過失、或為^ス利養、故説^フ法、如^シ是人当^レ墮^ル地獄、不^レ至^ル涅槃、云云、^{（釈観無量壽經仏経起）}
法苑珠林・法^ノ聴^ノ記・説法明眼論等意也、往生極樂障難、永劫墮獄根源也、尤可^レ慎、尤可^レ恐、但、上人云、^{（法然）}
進^ス人説、進^ム云ヘリ、能々可^レ計^ス時機也、

一、入^ル專修門^ニ以来、畢命為^ス期、教化之旨誓不^レ可^レ退転一事、

右仏道修行、以^テ相統^ス為^ス要故、一家大師四修中、以^テ初長時修^ム、後三修^ム、令^セ通修、妙尺甚深尚^ニ有^ル恐、然^ル省^ニ愚性^ヲ、大師上人無^ニ誕心^ヲ者、今度出離奈何、愚眼悲喜交^ニ流^ニ、深自^ニ慶仰願^ス、一切行者一入^ル此門、永莫^レ令^セ退転、故尺云、若能^ニ如上念々相統^ス、畢命為^ス期者、十即十生、百即百生、若^シ欲^シ捨^テ專修^ニ雜業^ヲ者、百^ノ時希得^ニ二^ノ、千^ノ時希得^ニ三^ノ、三^ノ已上、又云、一切往生人等、行住座臥必須^ニ勵^ス心^ヲ、已^ニ晝夜莫^レ廢畢命為^ス期、已上、又云、唯信^ニ仏語^ヲ、不^レ願^ス身命^ヲ、云云、^{（法然上人）}

以前九箇条甄録如^シ斯、同行衆各以^テ連署^ス、若此条目中一事至今違背^ス者、蒙^ニ釈迦^ノ・弥陀^ノ・恒沙諸仏・觀音勢至・普賢・文殊極樂界会清淨大海衆兼、仏法護持諸天善神等御罰、今生永失^ニ果報^ヲ、未来成^ニ三塗沈淪身^ヲ而已、仍誓罰之状、如件、

于時天文廿三年二月廿六日

西方行者称念^{（縁寄）}

其以後、又七ヶ条・十一ヶ条・六ヶ条之条目を持参、其文言左ニ記ス、

七ヶ条之条目

定

- 一、不憚望世間名利、偏可專出離要法事、
 - 一、於當舍居住之仁可被除交衆、但、仏殿勤行可依意樂、
 - 一、酒并五辛、不可入之、住居輩者、於他所不可受用也、
 - 一、於當室令行姪事、堅制之者也、
 - 一、歌舞并高声・尺八等制之、
〔可脱力〕〔但脱力〕
 - 一、晝寢不致之、除自然病患之時、
 - 一、縱使自雖有道理、对他不可口論一事、
- 右所定如件、

天文拾八己酉年首夏如意日

十一ヶ条

別時道場法度之事

- 一、向西知合掌事、
- 一、可住見仏之念事、
- 一、道場内念珠不持之事、
- 一、随分掛心道場内不可睡事、
- 一、於道場称名外無言事、
- 一、他人睡荒不可起事、
- 一、法談間少不可睡事、

一、惡事思惟不可有之事、

二、道場出入緩急不可有之事、

三、喰事飽滿不可有之事、

四、別時内道場外、惡事雜談不可有之事、

右条々堅可守此旨者也、

六ヶ条

禁制

一、誼訛・口論事、

二、高声雜談事、

三、無念火用事、

四、俗・出昼夜破威儀事、

五、遊山并長座事、

六、隱密談合事、

余律令如常、

其以後、重而又、当山先方丈直(知恩院)上人(感榮)・專(孤雲)上人被差出候条目之写、善故・了伝持参文言如左、

止惡修善

一、從前々被仰出 御公儀諸法度、并仏家之法式・称念上人之遺誠、急度可相守、附、名聞利養卑劣働堅停止之事、

二、勤行・法事叮嚀相勤、并仏閣已下等掃除、油断有間敷事、

三、專守一宗之風儀、不可混他宗之異(衣)躰・異風、尤新義・新法者、如御条目急度可被相守事、

一、寺院住職不届之僧并於不律儀者、早速從近所門下加諫言、於無承引者、本山役者迄可被致内通、若從他所其聞於有之者、当人共同罪可申付事、

一、道心者并在俗五重相承堅停止事、御条目次先祖代々毎度雖被仰付、近年別而放埒之由有其聞、弥以入念急度可被相守、若於無抛仁者、五十以後之者、能々其心分見届可有許容、但、同行不可過式人之事、

一、如先例、二十年未滿之僧、大寺不可致住職、縱令雖為小寺、由緒有之寺院ハ、〔金〕論議之上ニ而住職可申付、并兼日無其沙汰僧、俄及死期名弟子、不可致寺院附囑之訴訟事、

一、住持訴訟之事、其僧寺持歟所化歟何方ニ而も、無慈悲能々世・出共ニ可遂吟味、縱以檀方縁怙雖頼之、〔故〕無作と訴訟申來間敷事、若其僧不届儀於横聞者、急度重科可申付事、

一、諸寺家寮舍於不届僧者、住持急度仕置可申付、且亦住持於不届者、寺僧方々可加諫言、何も於無承引僧者、断近所門下江、其上ニ而本山江可申來事、〔知恩院〕

一、諸浪人并胡乱成者不可抱置、若於無抛仁者、本山役者并近所門中江可致其届、附、小者已下等迄博突堅可申付事、

右之条々、若違背之輩於有之者、縱雖為名家之一族、可処重科之条、如件、

宣天和三癸亥秋清文日

〔知恩院〕
本山方丈

〔感榮〕
直譽御判

閉塞諸惡道

頌云、

通達善趣門

(孤雲)
專譽上人条目

定

- 一、惣守諸惡、莫作衆善奉行之教誡、別念難遂往生機之、重益如法可被相守之事、
- 一、對在家之人、猥不可五重相伝、若於五十歲已後深信者、可有少々許容事、但、除他寺之檀那及多衆、
- 一、於平僧并長老之中、若不顧宗旨之作法、放逸無慙之族有之者、或寺中或組中、為其中間と兼日可加異見、若不承用者、早速可被遂本山江其斷事、

(知恩院)

附、小僧・同宿道心者、放埒無之様ニ急度可被申付、若無作法之儀有之者、可為師匠院主無念、

- 一、仏閣建立・修覆等儀、応其寺之分際、不及後代之難儀様可令經營、若不加相応之修覆於在任者、可為越度事、
- 一、私用勿論縱雖建立之儀、不可附置寺院江借金、若於法度以前之借金有之者、当人住職之中可償事、
- 一、密以金銀不可契約後住之、若於違背者、露頭次第先住・後住共急度可申付事、
- 一、就住持替、縱雖直弟年序、不相応者住持之儀不申付之間、寺僧并諸旦那那不可理不尽之訴訟事、
- 一、附来祠堂銀者、為常住物之間不可聊爾、若無拠入用有之者、住持・寺僧并頭檀那中、吟味之上組中江窺之、於許容者、右之面々急度可相濟之、被致手形連判、組中江可被相渡之事、但、組中及寺僧無之寺院・草菴者本山江可窺之、

- 一、寺中之僧徒、可隨諸事方丈之下知、於違背者可曲事、

(為説)

附、住持若於非分之下知者、其寺之組中迄可屈之、

右之条々急度可被相守之者也、

元禄三庚午年二月日

知恩院

(孤雲)
專譽

(孤雲)
同專普上人条目

申渡条々

一、為出家者、寺外江出時者、如法可着袈裟・衣事、

附、不可混他宗之衣鉢、

一、惣芝居等之見物、其外場所惡鋪所江出、遊山之義(儀)可慎之事、

一、從暮六過不可出門外江、若無拋用儀有之者、木札を以可出入事、

(元禄二年)
午七月

右之諸条目、(白誓秀通)方丈一覽被成候得共、此度書出候品者、一ヶ条も不相見候、從其方書写差出候九ヶ条之中ニ、拋諸

雜行、可レ成ニ一向專修之身ニ事ト被制置候得共、誦誦等之正行を可抛ト者無之候、一向專修之行人、可レ兼修助・

正旨ハ、銘心抄上卷相見ヘ候、其方共門中江新書出候条目トハ相違之事候、然共為念ニ候間、右諸条目之外ニ、

証拠ニ可成古來之書物有之候者、尋出持參可仕旨被仰付候、其後も証拠ニ成候書記タル物ハ無之哉ト、度々尋候得

者、様々吟味仕候得共無御座由申之、左候ハ、右之外証拠可成物無之旨、口上書仕可差出由申渡候ヘ共、致難洩

不差出候、

一、(元禄十六年九月)同八日、右之三僧、為節供之祝儀參上、方丈御對面被仰候ハ、法中之諍論不組合事候、殊一心院ハ捨世寺、其上

(縁筆)称念制誡ニモ相論不可致之旨、堅被制置候、何事門中と和融之上ニ而、相談を以作法も被相定、可然之旨被仰渡

候得共、無返答退出、

一、一心院京門中之外、洛外并田舎之諸末寺・檀那共相加り、大勢致出京、寺内之三役・門中之六役江相廻り訴候事、

弥以騒動ケ間敷候ニ付、(九月)同十二日、三僧方丈江呼寄、役者を以被仰聞候ハ、此度其末寺江被申渡候儀、先其分ニ

可被差置候、追而御了簡被成可被仰付候、(知恩院)從本山御押ヘ被置候通、從其方末山中江可被申渡候、左候ハ、最前

被出置候条目、末山（白善秀道）申候ハ、請取置、重而之御吟味を可被相伝旨申渡候ヘ者、三僧共承知仕候由ニ而退出、即刻善故・了伝立帰候而申候ハ、被仰付奉畏候、乍然右之条目ハ、末山ニ差置、重而御了簡被成被下候様ニ、仕度之旨願候ニ付、遂披露候得者、方丈被仰候ハ、此方之下知相背、従当分法度ニ立置度と申儀歟、其段ハ大切ニ

候間、能々分別可仕之旨、為申聞候得者、罷歸り分別可仕旨申之退出、

一、同十四日、了伝参上、最前差出候条目、此方ヘ請取置候旨申之、依之、一昨十二日為申聞候通、弥得其意候哉と、再篇為申聞候得者、罷歸善故ニも可申聞旨ニ而退出、

一、同十六日、善故・了伝参上、先日被仰渡候通、此度末山中江条目出候儀、先其分ニ可仕候、追而御了簡被成候而、可被仰聞之由承知仕奉畏候、其段門中江可申達之旨申之、住持ハ持病差発候故、令不参之由断、

一、同十七日、一心院末寺之一蘭聖光寺江手紙遣召寄、六七人同道ニ而登山役者対談、昨日一心院衆中江申渡置候事有之候間、一心院江参委細可被致承知旨申渡候、各奉得其意之旨ニ而退出、

一、同廿日、一心院末寺竹林院（五条下寺町）・撰取院（近江国大津道分）・正定院（下嵯峨川端）入来、去ル十八日、於一心院被申渡候ハ、於本山被仰候ハ此度之義（知恩院）

先其通ニ可仕候、重而御了簡被成可被仰聞之由ニ候と被申候付而、従末寺相尋候ハ、重而之御了簡迄、勤方如何可仕候哉と申入候ヘハ、重而御了簡迄ハ、此度書出シ候条目之通、被相勤候様ニと申付迷惑仕候、此段御丈室江も遂披露申渡之由ニ而、役者共宅江廻り退出、

一、同廿二日、一心院末寺役者方迄参為申聞候ハ、此度書出候条目之通可相勤旨、善故・了伝末山中江申渡ニ付而、（京極親小路）聖光寺一昨日寺を立退候旨告来候間、御届申上候由ニ而退出、

一、同廿三日、六役之中如来寺・勝藏院登山、此間一心院門中為惣代三四人宛并且那相加り、銘々共方江も度々訴来候由演述、依之、従最初之段（善故・了伝）、兩人江咄申候得ハ、先々騒動為御鎮御押被成候段御尤存候、此上我々も加異見可

申由ニ而、直ニ一心院江被参、先日両度（白善秀道）ニ及方丈并役者迄御請被申、慥ニ領掌之儀、只今ニ至り変改之段、道心

者ニ不似合事ニ候、何も異見ニ隨、先相延シ置、重而之御吟味を可被相伝之旨、連而異見被致候得共、道心者共依用不仕候事、

一、同廿四日、善導寺（京師）・如來寺（六角大宮）・勝嚴院（關由小路）・大雲院同座ニ而、一心院道心者兩人招之被申候ハ、頃日一藤聖光寺（京極後小路）も退寺、

門下騒動之儀ニ候、方丈被仰出候御異見之通致承引、先諸末寺之騒動を相鎮、重而御吟味之上ニ而、作法被相定可被下之旨被願、可然候と様々被致異見候得共、承引不仕候、

一、十月三日（元禄十六年）、天性寺（京極三条）・大雲院寺内之役者三人列座ニ而、善故（善故了伝）・了伝招之申渡候ハ、先日兩度迄隨承引之段御請申上、

去ル十八日門中江对シ致変改候事、不届之由申渡候ヘハ、彼者共返答、我々共被仰出候通、重而御吟味迄延引之段申渡候処、從末山中勤方之義（儀）相尋候故、此度書出候条目之通古法候間、其通可被相勤候由申渡候、彼方々尋申候故、右之通申渡候と、我儘之致返答退出、

一、一心院末寺（千本）称念寺（京極高辻）・透玄寺（京極中之町）召出、一心院末寺入院之砌、如古法可相勤之旨、被致手形之由、其古法と申候ハ、如何様之事候哉、書付可致持参之旨申渡候ヘハ、其以後書付持参文言、如左、

一心院諸末山入院之砌、三ヶ条之手形被申付候内ニ、一心院之作法、如古法可相守旨、手形仕候儀ハ、如何様之儀ニ而候哉と、就御尋申上候、右之三ヶ条被申付候事ハ、寛永八年本末爭論有之付而、自今以後本末無紛ためニ仕、来ル証文ニ而御座候、全以此度被書出候法式之儀ニ而者無御座候、末山相守候作法之趣ハ、

一、入院以後内陳入并說法、附、祝儀振舞之事、（陣）

一、京門中毎年從大晦日登山仕、述歳暮之祝儀、直ニ一心院ニ宿仕、翌朝年始之礼相勤、其節門中同席ニ而、对衆中門中銘々ニ十念授与之、其以後一心院住持同道ニ而、御本山江御礼ニ罷出候御事、（知恩院）

一、一心院無住之内ハ、門中々輪番ニ而住持役相勤候事、

一、一心院住持替之節者、門中衆中談合之上ニ而、住持見立御本山江願候御事、

一、一心院門下ニ惡僧有之、可及曲事儀候得者、本末立合評議之上相究候事、

二、一心院門下之長老、他流之寺ニ而説法不仕、勿論於自寺他流之僧ニ説法不致候御事、

三、一心院ハ古来ハ門中衆中相持ニ而、何事も双方立合、相談之上諸事議定仕候御事、

右之通ニ御座候、

(元禄十六年)

当五月一心院ハ被差出候五ヶ条之法度書之内、第三已下之ヶ条ニ、七種之品々被書出候儀、開山称念上人^(綠菅)之御条目

七ヶ条・九ヶ条・十一ヶ条、毎度御公儀并御本山御代々之御条目之内ニ、右之趣一件も見え不申候、此度被停止

之ニ付、諸末山難立迷惑仕候、已上、

元禄十六癸未十月廿八日

田井専念寺覚菅印

京千本称念寺唱菅印

(京極萬社)

下京乘願寺真菅印

(千本)

上京称福寺自菅印

(京極中之町)

下京透玄寺光菅印

紫竹招善寺廓菅印

(川端)

下嵯峨正定院軟菅印

下京竹林院齋菅印

(五条下寺町)

市原静林庵一菅印

下津谷迎接寺誓菅印

(柳屋)

上京西福寺梵菅印

北嵯峨称念寺成誓印

(下桂) 桂極樂寺淨誓印

(通分) 大津接取院靜誓印

(東七条) 下京正行院誓誓印

病氣不參念仏寺

(河) 中川宗蓮寺
檀用故不參

(天和町) 遠方故不參阿弥陀寺

(京極線小路) 遠方故不參同全寐寺

(山城園寺邊郡) 下京聖光寺
無住

(日野) 大病故不參惠福寺

其後、又右門中より書付差上ル文言左ニ記ス、

追而申上候覺

永祿十三年庚午三月十九日、一心院登普代之書出、門中ニ所持仕候、則書写シ差上申候、

定

一、敬上慈下之事、

一、(心院)(義)於当流義非知識之輩、不可勸化事、

一、渡世為旨無実心之族、雖望入斯門、堅不可引入事、

一、背師命之輩、於門中不可許容事、

一、初發心之族者、三ヶ年之間可勤沙弥、其内不可着裳衣、堅相過千日可免許袈裟事、

附、於着袈裟・衣者、縱雖遠國之輩、(一心院)於当流之影前可改之、

一、座牌可為階老次第事、(戒廳)

一、号別時執行自他寺招結衆之時、非当門流者不可交其席事、(一心院)

一、以美心不帰此門下之輩者、不可入別時之結衆事、

一、於殺・盜・姪三罪之輩者、永可擯出之、若至余罪者、隨輕重、或三箇年、或一回或百日勤仕、沙弥者可免許事、(箇九)

一、於当門中本寺・末寺住居之輩者、各対師長無請暇而、恣不可流行事、(一心院)

一、於門下居住之輩者、当院之名帳可注置交名事、

右条々、以衆議定之了、

永祿十三庚午年三月十九日

(緣覺)
称念上人之定

(天竺)
登普在判

別時念仏法度之事

一、入道場之時、塗香・叉手并禁足可有之事、

一、見仏要期、住余念不雜心可為無間事、

一、外陳・内陳互雜語・用所不可弁事、(傳)

一、入道場列座衆、無言可為如法念仏事、

一、当番衆、後番之着座次第可替事、

一、縱使自雖有道理、対他不可口論事、

一、食时会合不可違時之事、

(然阿良思)
三代上人御相伝云、

於所者清淨道場 於身者沐浴清淨

於衣裳者清淨服 於威儀常立常座

於食一食長齋、不可食酒・肉・五辛之不淨也、

右、且為報仏恩、且自身為往生、堅可守此旨也、

具在前、

于時天文二十年二月時正天

右従一心院二通之書出も、門中從來所持仕、罷在候ケ様之書出之中ニも、此度停止之鉦・鉢・杵・帽子・長念數・

諷誦・読経等之儀、一事も相見不申候、永禄十三年登誉上人ケ条之趣を以、唯今迄於一心院之勤方ニ而御座候、此

度末山江停止之品々ニ而者、寺役之儀、諸寺之旦那者不致同心、着当難儀仕候間、御了簡被成下候者、難有可奉存

候、以上、

元禄十六年未十一月五日

(干本)
称念寺唱誉印

(京極高辻)
乘願寺真誉印

(干本)
称福寺自誉印

(京極中之町)
透玄寺光誉印

(五条下寺町)
竹林院齋誉印

惣門中

知恩院御役者中

(元禄十六年)

一、十月十九日、一心院住持并善故・了伝其外衆中江、彼門中双方共ニ呼出、六役・三役列座ニ而以書付申渡寛、

去五月、從一心院五ヶ条之法度書、末山へ差出之第三以下之ヶ条ニ付而、永々本末及相論、依之、被仰渡寛、

一、去比從一心院末山江新ニ条目就被差出、京夷之諸末山并諸寺之且方迄及騒動、条目之通ニ而ハ末山難立之旨、一

心院江訴之事、雖及多日一向許容無之、難儀仕之旨、去八月末ハ役者迄訴来事及度々、依之、九月五日一心院并

善故道心・了伝道心被召寄、様子御尋之处、住持被申候者、愚僧ハ曾而不存事ニ候、式人之道心者ニ御尋可被成

と之返答也、善故・了伝ハ一心院之古法之由申之、兩人之返答ニ付而、重々雖被加御吟味、分明之無会通、同八

日彼三僧参上之節、穩便ニ沙汰仕可然之旨、雖被仰含得心無之永々相論之、因茲、先以騒動を為可被鎮、九月十

二日、彼三僧被召寄、此度之儀者重而可有御了簡候之間、先其分ニ可被聞候、從本山被押置之旨、其末山中江も

可被相通候、左候ハ、右之条目ハ其方江返シ可申之間、請取置重而之御吟味迄可相待之旨、役者中を以被仰渡

候処ニ、三僧共奉畏之由、慥返答仕令退出畢、

(九月十二日)

一、同日善故・了伝致参上差出候条目ハ、其儘末山ニ被差置、重而御吟味可被下旨願之、(白誓秀道)方丈被仰候ハ、此方之下知

ニ相背、其儘末山ニ差置度と之願ハ、從当分定法ニ立度との儀敷、其段ハ大切ニ候間、分別仕可申出旨被仰渡候

へ者、罷帰分別可仕と申退出、同十四日了伝致参上申候者、差出候条目最早此方江請取置候由申之、依之、重而

役者中を以最前被仰出候通、弥得其意候哉と御尋候処ニ、同十六日善故・了伝致参上、弥畏入奉存之旨、役者迄

返答、依之、同十七日右之趣彼末山中江も、役者を以被仰渡候へ者、奉得其意候由返答、其後一心院も善故ヲ召

連、役者中江相廻り被述謝礼畢、

(九月)

一、右之通双方共ニ無異儀相鎮候処、同十八日善故・了伝此度書出候条目之通可被相守之旨、末山江申渡候由、依之、

又候哉、諸末山檀方迄致騒動、且亦彼門中之一藤聖光寺ハ、寺ヲ立退之由、門中之六役・山内之役者迄訴来事及

度々、此則道心者ニ不似合、表裏相違之二言故也、甚以不屈之至、急度私曲ニ可被仰付候へ共、永々之騒動為可

有御鎮、有恕被成被差置者也、右兩度領掌之上ハ、変改罷成間敷事候間、前々之通其分ニ差置、騒動ヲ鎮、聖光寺ヲも帰寺可被申渡候、強而難捨置候ハ、双方共ニ重而道理証拠分明可被申立候、御吟味之上可有右左御沙汰候、末山中ハ諸旦那を申宥、騒動を相止、聖光寺も被致帰寺、本末和合候と、影前恒例之報謝之勤、不可有怠慢者也、右從御文室被仰出之趣、門中之六役・本山之三役者奉之、双方江申渡畢、

(元禄十六年)
未十月十九日

右書付を以、双方江申渡候処ニ、末山中者無異儀奉畏之旨返答、一心院并道心者共不得其意、其座を立破候故押置、別而一通之書付を以申渡文言如左、

別而一心院江申渡寛

(元禄十六年)
去九月五日、

一心院住持并善故道心・了伝道心召寄、此度從其方書出候条目者、和漢兩朝之祖師諸聖教之中ニ被立置、浄土一宗之宗義并諸大祖師之御行義ニ令相違、有何之拠如斯書出候哉と相尋候ハ、古法之由申之而、諸末寺之手形帳并寛文三年淀念仏寺本末出入之御裁許状を差出候ハ共、此度書出候儀者、一品も不相見、依之、開山被制置書物有之候哉と相尋候ハ、少も無之旨相答、雖然、為念前来之法度書有之候ハ、可差出と申渡候ハ者、九ヶ

条・十一ヶ条・七ヶ条・六ヶ条、

(感榮)

直誉上人・專誉上人等之条目を持参ス、

(孤雲)

右諸条目之中、此度書出候品々之儀、一

事も不相見、依之、猶亦右書物之外、此度書出候条目之証拠ニ可成物有之候ハ、可尋出候旨度々雖申渡と、無之旨每度申之、然ハ此外証拠可成書物無之旨、手形可仕之由雖申渡と、致難決手形不仕候、件之通ニ而ハ古法と申儀可難立候、若於新法ハ、御条目違背之咎可難逢候間、得其旨重而道理証拠分明可申出者也、

(元禄十六年)
未十月十九日

(元禄十六年)
右之書付被読聞、当夏差出候条目之中之儀、証拠不分明候故、新・古之訳御立難被成候、以後正敷証拠出候迄ハ、唯今迄之通ニ可被差置候、追而之御吟味迄ハ、門中勤方如前々仕著ケ間敷義仕間敷之旨被仰聞候、一心院善故・了

伝曾而依用無之跡ニ而、今日者御請難申由申之、各退出、

一、十一月四日善故・了伝参上、(十月)去月十九日被仰渡候趣、被仰付置可被下之旨書付持参、

一、(十一月)同五日了伝召寄、昨日差出候口上書ニ判形無之候間、判形仕持参可仕之由申渡、其書付差戻候、明六日六役中寄

合候間、住持其外衆中不殘四時可被出候、其節過去帳・什物帳・祠堂帳・称念上人之御影并所持之念珠、此度其門中江差出候五ヶ条取揃可致持参由申渡、

一、同六日早朝ニ、善故役者寮迄参候而申候者、昨日了伝へ被仰渡候品々、今四時持参可仕旨被仰付候故、夜前衆中相談仕候処、(善故了伝)評儀終不申候故、今日罷出候事へ、御免可被下之旨申捨ニ仕、夫々直ニ一心院住持并兩僧二条御奉行所江罷出、訴状捧候由、

同日晩方、水谷信濃守殿家来甲田兵左衛門より、手紙ニ而一心院出入ニ付、書物共勝手次第可致持参之旨申来候付、明日持参可仕由及返書、(勝早、京都町奉行)

一、同七日水谷信濃守殿江六役勝巖院・天性寺・大雲院、(勤解由小路)当山役者三人、書物共不殘持参、從発端昨日迄之様子委細取次迄申達、猶又從当山之願書一通差上候文言如左、(金經二条)

願上候口上之覚

一、(元禄十六年)去夏中当寺内一心院、新ニ五ヶ条之法度書彼諸末山江差出候、寺内ニ乍罷在方丈并役者江不相窺、任我意候段不

届之至御座候事、(白誓免道)

一、右之儀ニ付、京夷之諸末寺・旦那迄致騒動及相論候故、追而可致了簡候間、今度者先其分ニ可差置旨申渡候へハ、双方共ニ得心仕相鎮候処、善故・了伝表裏相違之ニ言を申出、又候哉及騒動候、道心者ニ不似合ニ言を申出候儀、私曲之至御座候事、

一、其以後毎度召寄、重々申渡旨雖有之候、一向許容不仕、下知違背仕候事、

右之通ニ而者、向後諸末寺之仕置難成奉存候、一心院并善故・了伝被召寄、御吟味之上急度被仰付可被下候、已上、

(元禄十六年)
十一月七日

知恩院

御奉行所

役者

右之趣取次遂披露候処、(水谷勝重)信濃守殿御对面被仰聞候者、昨日一心院訴狀致持參候付而、一心院江為申聞候ハ、願之事

有之候ハ、知恩院江可申入之旨申渡、訴狀返候処、一心院申候ハ、一心院義ハ(儀)知恩院之末寺ニ而も無之候ハ、

構有之詎ニ而無御座由申候、此段遂吟味可被申出候由、被仰渡候付而、何も退出則罷帰、一心院并善故・了伝可罷

出之旨申遣候処、住持ハ在寺候得共、善故・了伝ハ談合仕候事御座候而、他出之由返答、然者住持并殘ル衆中招連

則刻可被出之旨申遣候、住持并忍心・清故參上候付相尋候者、昨日公儀江訴狀捧候由、御奉行所ニ而令承知候、

先以諸末寺公儀江罷出候儀、先達而本山江申届罷出事ニ候、然ニ無其儀罷出、不届之至と申候ハ、致迷惑返答無

之、且又昨日於御奉行所、一心院儀当山末寺ニ而無之旨申上候由、從御奉行所被仰聞候、一心院ハ(知恩院)当院寺内之塔頭

ニ候得者、末寺と申事も余所ケ間敷相聞候、当山之眷属ニ而乍有、支配ニ而も無之、末寺ニ而も無之由申上ル段、

誑惑之至候、住持返答ニ、衆中共兼而御末寺ニ而も無之由申ニ付而、右之通申上候と申之、從此方申渡候者、当山

末寺ニ而無之詎書付仕、可差出旨申付、

一、(元禄十六年十一月)(水谷勝重)(京極三条)同八日、信濃守殿江天性寺・九勝院被遣、一昨日一心院其許江御訴訟ニ罷出候時分、一心院義当山末寺ニ而無之、

構無之寺と申上候由、言語道断我儘之至御座候、先以此義御吟味可被下候、本末無疑書付進之候、此段御吟味可

被下候、將亦一心院儀從方々祠堂之金銀も多有之候、什物共様々有之様ニ承候、輕キ者共寄合罷在事ニ候へ者、

此砌左様之もの散在可仕も難量候、急度御吟味奉願候由被仰遣、口上書之覚如左、

口上之覚

一、公儀之御法度并臨時ニ從方丈被申渡候諸法度、毎度一心院江役者共申付、証文取置候事、

(知恩院住持白誓秀道)

一、一心院代々住持相定候儀、彼末寺并衆中其人品を見立、役者迄願之候付、從方丈住職可仕旨書狀差遣、召寄入院申付候事、

一、以前之知恩院者、有來勢至堂ニ而御座候得共、只今之本堂、西北之方之地、惣門迄者（徳川家康）権現様御開被遊候、諸塔頭者山際ニ門扉を並罷在候、其砌当院塔頭之外者、悉他所江御退被遊候、一心院も寺内之塔頭故、其儘御差置被遊候事、

一、知恩院領之内、諸塔頭配分多少不同有之候へ共、一心院江も（朱書）「拾」（朱書）「七斗七舛式合四夕八才」廿四石余宛行事、

（朱書）「文政九戌年二月御役人
河原・村上御両江願、元帳写之、」

一、別院ニ而無之故、門各別ニ建不申候、且亦若別院ニ有之候へ、一心院代々并彼院旦那之墓所、一心院屋敷内ニ可葬置儀ニ候得共、別院ニ而無之故、諸塔頭並ニ惣卵塔ニ葬申候事、

一、從元日至歲暮迄、年中之諸礼急度方丈へ出仕候事、

一、毎月朔日一心院衆中召連、本堂法事之中、住持・衆中共ニ相詰、法事過方丈江拜礼仕候事、

一、御忌一七日之法事者、直末之諸長老相勤候、七日之中昼夜之念仏者、一心院并彼末山之役ニ而相勤候、且亦六月廿五日・七月廿五日本堂說法之砌之念仏、勢至堂毎月廿五日之說法之砌之念仏、是又一心院役ニ而相勤申候、殊十二月廿五日、勢至堂之說法へ毎年一心院住持ニ申付候事、

一、一心院末寺之中鉾鉦出来候時者、每度從一心院役者迄相願、裁許を請候事、
（京都所司代松平信康）

一、御所司・兩御郡代年始御礼之事、一心院・良正院・常称院・忠岸院・九勝院者（知恩院山内）方丈御礼ニ參上之節召連、御礼（知恩院山内）

為致候事、

一、寛永八年（徳川家光）大猶院様御上洛之刻、知恩院諸末寺一同ニ、一心院・良正院等（知恩院山内）御目見仕候留書、御城ニ可有御座候、

其写此方ニも所持仕候事、

右之通紛無御座候處、一昨日一心院於 御奉行所、知恩院末寺ニ而無之、構も無御座之旨申上候由、誑惑之至、急度御吟味奉願候、已上、

(元禄十六年)

未十一月八日

知恩院役者

三役印

六役印

御奉行所

(十一月八日)

一、同日酉之刻、一心院并善故・了伝可参之旨申遣候處、三僧共ニ他出之由返答、左候ハ、衆中之内可参旨申遣候

ヘハ、清故参上申渡候ハ、暮日ニ寺外江不出之旨先条目ニ候、何とて夜陰ニ他行仕候哉と相尋候得ハ、住持ハ病

氣ニ而医者方江参候、(善故・了伝)兩僧者何方江参候哉不存之由申之、早々尋出可罷越之旨申渡、其後善故・了伝参上ニ付、

一心院義当山末寺ニ而無之段、於御奉行所申上候由、其訳書付可差出之旨申付候處、(善故・了伝)兩僧返答ニ為指、書付も無御

座候ヘ者、書付仕差上候義難仕由申之ニ付、左様ニ不分明之儀ヲ、於御奉行所末寺ニ而も無之、構も無之旨申上

候段、甚誑惑之至ニ候、(知恩院)扱又当寺内之塔頭ニ而無之ものニ、廿四石余之寺領ヲ配分仕置ものニ而候哉、言語道斷

之由申渡候ヘハ、(知恩院)当山御忌昔ハ勅会ニ而御座候處、斷絶仕候時分、(縁書)称念上人一七日之念仏ヲ被始、于今相続仕候、

猶亦阿弥陀堂ハ称念上人被致寄附候付、御代々御懇ニ而、右之寺領御寄附之様ニ承候と申之、此時_(知恩院出内)常称院申候ハ、

御忌七日之念仏ハ、(法然)開山示寂々以来終ニ断絶無之候、御伝供之節方丈御読被成候条文ハ、(知恩院住持)当寺第二代源智上人_(縁書)之

御制作ニ而候、七昼夜之別時念仏執行と有之御文言ハ、毎年其方共も乍承、(縁書)称念之被始候と申事、不実之至言語道

斷、扱又阿弥陀堂ハ称念建立之由、是又妄語ニ而候、(縁書)称念從上京十九年前建立之由、棟札并記録亦分明也、道心

者ニ不似合妄語申候事、急度可及脱衣義候得共、(京都町奉行所)当分二条御奉行所之御吟味之中ニ候間、先其分ニ差置候と申渡

候、如斯申聞せ候ヲ承、其後御奉行所ニ
而了伝対決之節修復と申替候、

(十一月)
(水谷勝亭)

(知恩院山内)

一、同十九日、信濃守殿家来谷田貝太次兵衛方より手紙到来、則忠岸院罷越候処、公事役人出會、一心院出入之次第被

尋候付、始終之訳委細申談候其節、一心院差上候訴状見せ被申、致披見候処、段々偽を書載候其訴状之中ニ、末

寺共蒙免許度、願之事八月末と書出候此儀ハ、五月中より一心院へ段々訴へ往復及爭論事ニ候、(知恩院住持) 扱又従方丈末寺願

之通許可申之旨被申渡候由、其上十月十九日方丈出座、被成越訴仕候末寺江、願之通心儘ニ勤可申候、本寺従一

心院申付候事ハ、用申間敷と直ニ御申被成候と、訴状ニ書載候、此兩条以之之外之偽ニ而御座候、仮令ニも許可申

と被申候義、(儀) 全以無御座候、扱又方丈出座之節被申渡候事ハ、重而道理証拠吟味之上、落居可被申付間、夫迄相

待可申と被申渡候処、九月十二日・同十六日兩度迄慥領掌仕候上ハ、変改為仕間敷候、夫迄ハ前々之通相勤可申

候、其内従一心院如何様ニ申かけ候共、依用不仕、騒動ヲ相止可罷在旨被申渡候、其儀ヲ掠、其訳各別ニ取成、

訴状書載候事、大邪偽之惡僧ニ而御座候、

(十一月)

一、同廿六日、公事役兩人より手紙到来、一心院本末出入之儀、明廿七日被致吟味候間、役者共可参旨申来、翌廿七

日役者不殘信濃守殿御宅江参上、一心院并善故・了伝彼諸末寺被召出、双方委細之御吟味、従末寺証拠之書物共

数通出之、(知恩院) 従当山も一心院当山末寺ニ無紛書物共出之、信濃守殿御披見之上、猶又巨細之御僉議有之候処、従一

心院ハ証拠之書物無之ニ付不差出、依之、道理不相立不首尾ニ而退出、

一、十二月廿三日、朝飯後公事役兩人より手紙到来、今日一心院出入裁許被申付候間、役者共可罷出旨申来、役者不

殘信濃守殿御宅江参上、一心院住持并善故・了伝彼門中各罷出ル、以書付御裁許被仰渡文言、左ニ記之、

申渡之覚

(白誓秀道)

一心院と末寺出入之儀、知恩院方丈より被申聞、一心院も訴出候付、召寄段々令吟味候処、此度一心院より末寺江

出候条目之儀、一心院開山称念上人掟書七ヶ条・九ヶ条・十一ヶ条之内ニも無之、古証文_(録書)も無之、口上ニ而申伝

候古法之由、一心院申候へ共、申伝斗ニ而者難立候条、唯今迄有来候通可相勤候旨、一心院并末寺江も申渡候、尤一心院儀本山知恩院へ弥勤来通違背仕間敷事、

(元禄十六年
未十二月)

如斯御書付御渡候付、役者共即刻申上候、御裁許忝奉存候、但、一心院義知恩院末寺ニ而も無之段申上、其外重之我儘共御座候間、重而書付を以可申上之間、左様思召可被下之旨申上退出、

一、同日及暮三役出座、(德普力)一心院住持并善故・了伝其外衆中三人、次ニ上德寺召寄申渡候へ、今日於公儀被仰渡候趣

承知可仕候、就夫是迄当山江相背候儀数多有之候、此義ハ来春急度可被逐御吟味候、左様ニ相心得可罷在候、夫迄ハ一心院住持江善故を始、衆中不殘御預ケ被成候間、遠方へ遣し申間敷候、住持儀者弟子上德寺江御預ケ被成

候、勿論池田法園寺をも呼寄可申之旨申渡ス、(撰津園豊嶋郡)

一、元禄十七申年二月朔日、善故・了伝召寄申渡候へ、一心院之縁起、買付田地之証文并奉加帳、去年公儀江差出之由、其聞有之候、御文室一覽可被成旨被仰出候間、持参仕候様ニと申渡、(白誓秀道)兩僧返答には、衆中相談仕可差上之

旨ニ而退出、

一、同日善故・了伝参上、昨日書物共御覽可被成旨被仰付候得共、衆中申上候者、御覽ニ入候而、何之用ニも無之候間、掛御目候儀罷成間敷由申切候、左候者、不罷成旨口上書仕、可差出之由申付候処、其段も得仕間敷候、我々共ハ可預御追放身ニ而御座候得者、覚悟仕罷在候、然上ハ入御覽候事、罷成間敷之由申之、從此方尋候者、御追放之儀ハ今ニ被仰出儀も無之処、從何方承、左様之義申候と尋候得者、善故申候者從何方と申事も無御座候、

左様ニも可有御座様ニ承、罷在候と返答仕退出、(儀)

一、同三日六役・三役列座、一心院并善故・了伝召寄相尋候へ、一心院義当山末寺ニ而無之由、(儀)(知恩院)去冬於公儀申上候儀ハ、如何様之証拠有之申上候哉と尋候へ、別ニ証拠と申儀ハ無御座候得共、(元禄十六年)後光明院様崩御之時分、御諷

經相勤候、明正院樣崩御之御時ハ、本寺分斗相勤候樣ニ、御法事奉行日野殿・今城殿被仰渡候、然所一心院ハ本

寺ニ而御座候故、御諷經相勤候由申之、從此方為申聞候者、(德川家綱) 殿有院樣御他界之時分、本寺之外諷經御停止、此時

一心院代僧差下度由、(玄誓、知恩院住持) 万無和尚江相願候ヘ共、本寺ニ而無之寺ハ、無用之旨從江戸申來候上ハ、一心院下向代僧

ホ之儀、罷成間敷由御申渡、御諷經不相勤候、明正院樣崩御之御時、諷經之事ハ本寺ニ而無之、寺々相勤候事、

(千本出川、般若三昧院) 般舟院之記錄之写有之旨、為申聞候ヘハ、不及返答、

一、同四日、水谷信濃守殿江役者如來寺・大雲院・九勝院參、善故・了伝儀我儘、弥以相募候付、追放申付度、(白誓道) 方丈

ニも被存候、委細之詔書付致持參候段申上、一通差上ル文言、如左、

謹而言上

(元禄十六年) 去夏從一心院彼末山中江新法之条目就指出候、本末及相論、既公儀江訴上候処、旧冬御吟味之上、本末相論之儀、

御裁許被成下難有御事候、然共其砌一心院者、知恩院末寺ニ而無御座、構も無之由、猶亦廿四石余之寺領者、知恩

院領之内ニ而無之、元來有來買付田地之由申之、殊訴狀之中、種々之偽を書立、且亦此方にて吟味仕候ヘハ、前後

相違之我儘之申分多之、剩新法之条目差出候儀も、(白誓秀道) 方丈并役者江不相窺、其後公儀江訴狀差上候節も無其断、每

度申渡儀共、一向許容不仕候、諸寺院之内堪忍之僧侶者、其寺之住持之下知相守申候事、諸宗一同之格式御座候、

猶更別院ニ而無之旨、(元禄十七年) 去年十一月八日ニ書上候十一ヶ条之通、紛無御座候処、旁以我儘之働難差置候ヘ共、旧冬及

月廻候故、糺明難成ニ付、(善故、了伝) 至当春可致吟味候間、住持并道心者共、遠方江罷越候儀、可為無用之旨、旧冬申付置候、

依之、当月朔日善故・了伝召寄、旧冬公儀江差上候一心院之伝記并奉加帳、買付田地之証文、方丈一覽可有之候

間、可致持參之旨申付候処、翌二日右兩僧罷越、右之品々懸御目候事罷成間敷旨、役者迄申之付而、其謂を相尋候

ヘハ、可預御追放、我々共之儀候ヘハ、任仰書物共持參仕事罷成間敷旨堅ク申切候、不得心之我儘弥以相募候、

ケ樣之惡僧 御寺之塔頭ニ差置候而ヘハ、向後如何樣之惡事相企可申も難量り御座候間、(善故、了伝) 兩僧追放申付度、(白誓秀道) 方丈被存

候、

右之趣為御届如斯御座候、以上、

元禄十七年申二月四日

知恩院役者

三役

六役

御奉行所

一、九日未刻御用之儀有之候間、役者一人(水谷勝忠)信濃守殿宅へ可參之旨申来、即刻九勝院罷越、信濃守殿御逢被成、被仰聞

候へ、従方丈頃日被遣候御書付之儀、御所司江相伺候、寺内之儀者武家之家中同前ニ御座候、然所申付違背仕候

事、法外之仕合ニ存候と申候へ(滯留)へ、御所司ニも其通ニ思召候間、勝手次第仕置御申付可被成之由被仰聞候、

一、十日六役・三役列座ニ而、一心院住持并善故・了伝・助心・誓故・称欣・淨西井上徳寺・称念寺・乘願寺(京極高辻)、其外

一心院旦那共召出、申渡候次第、善故・了伝并衆中江相尋候へ、一心院祠堂金銀、請弘之勘定、善故・了伝二人

ニ而相斗候哉、衆中も立合存知候哉と相尋ル、了伝返答、兩人儀者上座故、先ハ相斗候、然共衆中も存知之事之

由申之、依之、衆中江相尋候者、(善故・了伝)兩僧申通候哉と尋候處、残ル衆中も如何ニも存知候由申之、一心院向後之作法

被仰渡候間、堅可相守旨ニ而、三ヶ条之定書(勘解由小路)勝嚴院読聞ス、右之定書一心院頂戴文言、如左、

定

一、如先規仏前勤行・掃除亦可為丁寧事、

一、有来什物・祠堂金銀不可紛失、毎年勘定之節者、末寺之老輩相加嚴密可令吟味事、

一、諸事之支配、關於住持不可任衆中之私意、住持衆中吟味之上可執行事、

右之趣不可有違犯者也、

元禄十七申年二月十日

本山四十二世

白誓在判
(秀道)如来寺印
(六角大宮)勝巖院印
(勘解由小路)天性寺印
(京橋三条)大雲院印
(京橋四条)在江戸常称院
(知恩院山内)忠岸院印
(知恩院山内)九勝院印
(知恩院山内)

一心院

右畢而、扱善故・了伝儀、(元禄十六年)去年以来段々不届ニ付、追放被仰付候、則当月四日御奉行所江差上候書付、九勝院読之、何れも江も相聞せ、(善故・了伝)彼両僧重々不届ニ付、脱衣可被仰付候へ共、其段者以御慈悲御用捨被成、洛陽・洛外御追放被成候段申渡候、但、什物・祠堂金銀之埒不分明ニ付、両僧押へ置、(海音)一心院住持・同弟子共、相残ル道心者共、末寺之

老輩二三人相加、可改置旨申渡候、右之者共一心院江罷帰、致穿鑿候所、道心者共不存旨申之、一心院ハ祠堂金銀

を以相統仕事ニ候、祠堂紛失仕候ハ、(一心院)当院立申間敷候、有所可申之旨、住持并末寺之老輩雖申之、道心者共相互

目を見合斗ニ而、有所不申候、依之、先程從役者中残ル道心者共も、什物・金銀之事存候哉と、御尋之節各存知之

由返答乍申、至只今不存と申儀、立間敷と責詰致吟味候へハ、助心・誓故兩人何方へ罷出候も、さきハ不存候へ共、

頓而箱二つ持来候、然共錠おろし鑑無之ニ付、其段相尋候へハ、了伝所持仕之由申之、道心者耆人了伝方へ参、請

取来明候而、帳面ニ引合候へハ、銀子尅貫二三百目不足ニ付而、是ハ如何様之訳ニ候哉と相尋候へハ、一昨日為可

致兩替、了伝取出し、上京之町人ニ預置候由申之、依之、道心者老人弟子良秀差遣、遂詮議夜九時請取罷燭、帳面ニ引合、住持并相殘道心者共江引渡申之由注進之、即刻善故・了伝洛中・洛外追放畢、

一、恕心・清故持来二箱之内ニ有物者、帳共有金銀借し置、金銀之手形共有之、

一、銀貳貫九百七拾匁六分

一、金拾匁兩匁歩貳朱

一、金七拾九兩一銀拾三匁七分

一、銀百五拾七匁

一、金三兩三步

一、銀五百目

一、銀壹貫三百目

右者有物也、

一、右之外、銀高四拾七貫三百八拾匁之借し手形有之、

右之諸色、一心院住持湛誓、同弟子良秀、同弟子上徳寺、同寺相殘罷有候道心者共、同末寺(千本)称念寺(京極高辻)・乗願寺立合相

改、住持并道心者共江不殘引渡者也、

一、十一日、信濃守殿江如來寺・忠岸院參上、昨夕兩僧致追放候旨御届申入ル、委細御聞届候由、深谷平左衛門を以(永谷勝重)
(六角大寺)
(知露院山内)
(善故・了伝)

御返答、夫々安藤駿河守殿御宅江兩人罷越、右之次第段々申入ル、当番松田貞右衛門江申置候、

右覺書之通、毛頭無相違者也、

宝永二酉年二月日

(奥書)

「乗願寺宝永二乙酉年、就開帳之願江戸下向、同年知恩院保徳院就公用江戸下向節、知恩院々此記録被遣、此通写、

(京極高辻)

手寄之寺社奉行江指上ヶ候様ニ被仰付候故、右之通書写、寺社奉行江指上ヶ候様扣也、

奉納門中箱記録也、

(京極高辻)
乗願寺十世

紙数五十六枚

真誉④

2、解 題

(イ) 伝 来

本史料を現蔵する紫竹招善寺は、『浄土宗寺院由緒書』(『増上寺史料』(集)第七卷)によると、寛永三年(一六二六)に心誉是西なるものによって開かれたとされているが、『一心院覚書』(以下、『覚書』と称す)の伝存する事情はまったく分からない。しかし、招善寺の由緒書が一心院を経由して増上寺の役者に提出されている。すなわち元禄年間には確実に一心院末寺院であった点、さらに本史料は奥書によって明らかのように、京極高辻乗願寺第十世の真誉によって書写されたものに相違ないが、この乗願寺も一心院末寺院であったこと等から、一心院末寺院の間で尊重されていた記録が、何らかの事情、たとえば住持の転任に伴って移管された等の可能性を想起できる。勿論、それが乗願寺から直接に移管されたものであるのか、偶然的に招善寺に伝存するのみであるのかについては速断し難い。

(ロ) 体 裁

表紙は藍色の厚表紙で、左上に「一心院覚書」と標題が書かれており、その下部に「全」と一冊本であることが示されている。また右下に「二十」と書かれているのは整理番号と考えられるが、何に因するものかは定かでない。また扉に内題等の記載はない。料紙は美濃紙の袋綴で、寸法は縦二七・二糎、横一九・〇糎、丁数は、奥書に「紙数五十六枚」と記されているが、墨付五七丁である。

イ 成立年時

奥書には、本書は宝永二年（一七〇五）に、京極高辻乗願寺が開帳の願出のために江戸に下向した折、知恩院山内保徳院から、この記録を書写して寺社奉行に指し出すようにとの指示を受け、これを書写した際の控であると記されている。したがって、本書の底本が他に存したことになるが、本文の末尾に明記されるように、宝永二年二月の時点ですでにそれが存在していたことは確実である。この一心院の本末争いの決着が元禄十七年（一七〇四）二月であるから、ちょうどこの一年の間に、恐らくは経過や結果を後世への覚えとするため、知恩院の役者らによって編集されたものと見做される。

（二）『知恩院日鑑』の関連記事

本史料は、元禄十六年（一七〇二）から十七年にかけて、一心院と末寺寺院との間に本末争いを生ずるが、その発端から京都町奉行の裁定に至るまでの経過を綴った覚書である。知恩院はその調整に当たらざるをえず、苦慮しながらも意を尽くして解決の方向を目指したようである。したがって、この一件に関する詳細かつ豊富な記事が、『知恩院日鑑』（以下、『日鑑』と称す）^{『知恩院史料集』第三卷、}の同時期に見られる。まず『覚書』の記載と『日鑑』との関連を次頁に表示する。

これを一見して分かるように、『覚書』独自の記載も若干存するが、*印で示したごとく、あたかも『日鑑』の記事を抜粋して編集されたかのように多くが、『日鑑』の記載と内容的に一致する。ただし、『日鑑』の記載を書写したというようなものではない。むしろ、編集に際して『日鑑』の記載も参考の一つとしたという程度である。たとえば、『日鑑』の元禄十六年九月四日条に、

一心院出入に関する記載の対照（備考欄*印：同内容の記事と認められるもの）

年・月・日				『覚書』		『日鑑』		備考	
(元禄十六年)									
九月四日				○		○		*	
五日				○		○			
八日				○					
十二日						○			
十四日				○					
十六日				○		○		*	
十七日				○		○		*	
二十日				○					
二十二日				○					
二十三日				○		○		*	
二十四日				○					
二十五日						○			
二十九日						○			
十月三日				○		○		*	
五日						○			
八日						○			
十一日									
十二日									
十三日						○			
十五日						○			
十六日						○			
十九日				○		○		*	
二十四日						○			
二十八日				○		○			
十一月一日						○			
三日				○		○			
四日				○		○			
五日				○		○			
六日				○		○		*	
七日				○		○		*	
八日				○		○		*	
十五日						○			
十七日						○			
十八日						○			
十二月八日						○			
十四日				○		○			
二十一日				○		○			
二十三日				○		○		*	
二十五日				○		○			
二十八日						○			
(元禄十七年)									
一月七日						○			
九日						○			
十日						○			
二十一日						○			
十九日				○		○		*	
二十日				○		○			
二十三日				○		○			
二十四日				○		○			
二十五日				○		○			
二十六日				○		○		*	
二十七日				○		○			
二十八日				○		○			
二十九日				○		○			
三十日				○		○			

二月 一日	○	○	○	○	○
二月 二日	○	○	○	○	○
三月 三日	○	○	○	○	○
四月 四日	○	○	○	○	○
六月 六日	○	○	○	○	○

一、一心院末寺聖光寺・竹林院寺中役者迄入来、今度称念上人百五拾年忌之各座之説法之廻状之次ニ、条目被^レ出候其内之儀共、一心院被^レ申付二候通ニ相勤候而へ、旦那寺之分へ今日立かたく、何茂末寺共難儀仕候故、達而此度之ケ条之通へ、用捨給候様ニ、衆中へ相願申候得共、承引無御座一候、銘々迷惑仕候、(中略) 去月^{八月}晦日ニも、右之通聖光寺始四人連ニて入来候、(下略)

などと記して、本末出入の原因が、称念の百五十年忌に際して一心院の出した新条目にあることが分かる。ところが『覚書』においても、はじめに同様の内容を記しているが、実際の元禄十六年五月日付一心院湛誉定書、同年八月二十九日付一心院末寺院口上書等を引用し、また書きはじめを八月一日まで遡って記述している。同様に『日鑑』の同年十月二十八日条には、

一、一心院門中、覺書差出候、

とのみ記されているが、『覚書』には実際に同日付で田井専念寺覚誓以下二十一箇寺連署（内六箇寺は諸事情によつて署名を欠く）の書付を載せている。同様に『日鑑』の同年十一月七日条に、

一、(勝泉、京都町奉行)水谷信濃守・勝巖院・天性寺・大雲院・当山三人同道、発端これ迄之書物共、今日差出候願書兩通持参、

(下略)

とあるうち、京都町奉行宛の願書とは、『覚書』に載せる同日付知恩院役者口上書のことである。ただし、これは同年の書翰『知恩院史料』(集)第三卷に同文を確認できるから、これを参考にしたのであろう。また『日鑑』の同年十一月八日条に、

(水谷勝卓、京都町奉行)

一、信濃守殿へ天性寺・九勝院被_レ遣候意趣へ、昨日役者共罷越候処、御聞届被_レ下旨忝奉_レ存候、弥御吟味奉_レ願候、且一昨日一心院御屋敷へ罷出、知恩院之末寺ニ而無_レ之由申上候旨、不届成義申上候、此儀先以御吟味相願奉_レ存候旨也、口上書一通持参候、(下略)

とあるが、『覚書』には同様に同日付知恩院役者口上書を収載している。さらに『日鑑』同十七年二月四日条には、

(水谷勝卓、京都町奉行)

一、信濃殿へ如来寺・大雲院・九勝院参候、一心院之善故・了伝儀、我儘申付、追放可_ニ申付_一之旨、委細訳書持参候処、(下略)

とあるが、『覚書』では実際に京都町奉行に持参した同日付知恩院役者口上書を載せて記述している。これらの例に示すごとく、『覚書』は実際の証拠となる記録等を引用しながら編集されたことが明瞭である。

ところで、乗願寺真誓の書写した本書成立に関する事情が、宝永二年の書翰『知恩院史料』(集)第三卷中の関連記事から推察される。六月二十四日付で増上寺役者に宛てた書翰に、

一心院儀ニ付、増上寺役者ノ書状、六月十五日到来、返翰之写、

(松井長重女)

(増上寺在持齋僧門局)

当月四日之貴翰、同十五日相届、令_ニ拝見_一候、然者御本丸御女中殿衛殿ノ其御文室様江被_ニ仰進_一候書状之写、御差越被_レ下、致_ニ披見_一候処、以之外相違之儀共御座候、一心院之道心者共其御地へ罷下、種々偽を申上候ヲ実事と被_ニ思召_一候と相見候、被_ニ仰下_一候通ニて無_レ之段、則一心院出入之始終記置候覚書、写進_ニ之候間、御披見被_レ成、此通委細ニ殿江殿江被_ニ仰達_一可_レ被_レ下候、此覚書之通、毛頭相違之儀無_ニ御座_一候、善故・了伝此方ニても一々偽計申立候儀ニ候へへ、於_ニ其元_一猶以驚を鳥之様可_ニ申成_一候、(中略)

(宝永二年)

六月廿四日

(經著、増上寺役者)

寿元和尚

(願著、増上寺役者)

靈鑑和尚

(重珍)

尚々、松井豊藏（重珍）も、右之儀ニ付預示候、其返書并覚書写候而進候間、其元々御届可被下候、頼存候、且又豊藏殿儀ハ殿衛殿舎弟ニ而御座候、宿所知レ不申候ハ、殿衛殿へ被遣可被下候、以上、

とある。これによると、本丸の女中殿衛なる者から増上寺の住持湛普門周に宛てられた書状を読み、一心院の道心者が偽りを述べて訴えていることを知って、一心院出入に関して記し置いた覚書を進上し、殿衛なる者に事実を説明して欲しいと依頼している。また尚々書には、殿衛の弟松井重珍からも同様の書状があったようで、これについても同様の覚書等を届けて欲しいと言っている。これらは、一心院の道心者らが京都町奉行の裁定による追放後、江戸に赴いて何らかの縁故を頼ったためではなからうか。また同じく増上寺役者に宛てた宝永二年九月二十三日付の書翰には、

去十三日之貴簡、昨廿二日相達、令三拜見候、然者一心院出入之砌、追放申付候善故・了伝、毎度貴山（増上寺）へ罷出、

御添手紙願候へ共、御許容無御座二候処、頃日御奉行所（寺社奉行所）へ願罷出候由、然共御添手紙無御座二故、御取上ハ無

レ之旨、然所御月番久世讀岐守殿役人中、右出入之訳被相尋二候付、先頃進置候一心院出入始終之覚書一冊、被

差出二被下候由、此上ニも右之者共強訴可仕義も可レ有レ之哉と、御内意被仰聞、被入二御念二候義忝存候、覚

書之通毛頭相違之義無御座二候、（下略）

とあり、追放された一心院の善故・了伝の兩人が増上寺を訪れ、さらにまた寺社奉行所へも頼って訴え出たために、知恩院に対する尋問があったようで、知恩院はこれについて、すでに進上してある一心院出入始終の覚書一冊の吟味を願っている。このように、元禄十七年二月に裁定がおり追放された後も、翌年になり善故・了伝らが関東に下向して訴え出たため、一心院出入に関して綴った覚書が必要となったのである。前述した保徳院下向の主たる目的が、これを届けるためのものであったのかどうかは分明でないが、その際にこの覚書を持参したことは確かである。そして

この覚書が、ここに紹介した『一心院覚書』の底本であることもほぼ相違ない。

(附) 諸 法 度 類

本書が、一心院の差し出した新条目に端を発する、本末争いについての覚書であるために、そして、知恩院の要請に応ずるための証拠物件として、一心院と門末寺院の双方がいくつかの法度類を示すに至ったために、主に縁誉称念の定めた法度類、さらにはそれ以後のものについても収載されており、ほかに有力な史料のない現状において、称念についてまた一心院の性格等に関して、重要な史料を提供することになる。本書の史料性格を考慮すると、正文の存在について些か問題がないわけではないが、以下に、『覚書』に収載される一心院関係の法度類について、その題目とそれぞれに対しての傍証の有無を示して置く(掲載順に記す)。

年・月・日

題 目

傍証の有無

元禄十六年五月日

一心院湛誉定書

無

天文二十三年二月二十六日

一心院縁誉称念道場法度(九箇条)

『称念上人行状記』

天文十八年(月日未詳)

一心院縁誉称念道場法度(七箇条)

『称念上人行状記』

(年月日未詳)

一心院縁誉称念道場法度(十一箇条)

『称念上人行状記』

(年月日未詳)

一心院縁誉称念禁制(六箇条)

無

天和三年(月日未詳)

知恩院直誉感栄定書

無

元禄三年二月日

知恩院専誉孤雲定書

無

元禄三年七月

知恩院専誉孤雲法度

無

永禄十三年三月十九日

一心院登誉天室定書

無

天文二十年二月日

一心院縁誉称念別時念仏法度

無

元禄十七年二月十日

知恩院白誉秀道定書

『知恩院日鑑』同日条

(ハ) 一心院の位置

一心院の知恩院内における位置付けは、年代によっても違うが特異的で難しい。縁誉称念が天文十七年(一五四八)に草創の当初は、知恩院境内の一道場に過ぎなかった。それが、元禄九年の『浄土宗寺院由緒書』によると、一二六カ寺の末寺を有する本寺にまで発展する。しかも、この書上の提出先を見ると、知恩院・増上寺のほかは、京都の知恩寺・金戒光明寺・浄華院、名越派檀林寺院とそして一心院というように、すでに無本寺としての扱いを受けており、少なくともこの時点において、知恩院の塔頭としての立場を脱していると判断できるように思う。この点については、『覚書』収載の元禄十六年八月二十九日付・同年十月二十八日付・同年十一月五日付の各一心院門末寺院書付によって、当時の一心院門末寺院の組織化を見ることができるところが、『覚書』や『日鑑』によって確認されたごとく、元禄十六年・十七年に末寺寺院の上申によって争論となり、知恩院の調整も落着を見ず、京都町奉行所へその裁許を仰ぐこととなるが、結果的には一心院は知恩院の管轄下のごとき扱いを受けることとなる。江島孝導氏が「知恩院塔頭について―元禄期以前を中心として―」(『水野恭一郎先生頌寿記念』(『日本宗教社会史論叢』))に紹介された、享保十六年(一七三一)十二月付の『覚』と題される記録に、

一、知恩院山内捨世本寺 一心院

知恩院領之内、高式拾石余配分

一、起立天文十七年草創、至享保十六年凡百八拾五年、開基^(縁誉)称念上人

とあって、享保年間には知恩院山内の捨世本寺として、他の二三カ院の塔頭とは区別され、また院領の配分も多くな

されているが、知恩院の管轄下であることには変わりがなかったようである。それにしても、こうした中途半端な立場は、恐らくこの元禄年間の本末争い以降、明治二十六年（一八九三）の華頂山内規約によって、山内塔頭から除外されることになるまで踏襲されたのである（『知恩院史』）。この『覚書』の内容は、そうした一心院の特徴的な歴史的背景を端的に表わしている。

〔附記〕 本書『一心院覚書』の閲覧・史料翻刻等に際して、ご許可を頂いた紫竹招善寺住職吹田盛徳師に、厚くお礼を申し上げる次第である。